

幼少期におけるペット曝露とアレルギー発症

前回の抄読会で経時曝露を扱うモデルとして分布ラグモデルを紹介し、実データとして利用を考えているエコチル調査についても述べた。

現在はエコチル調査のデータのうち、幼少期におけるペットの飼育の有無と喘息などのアレルギー発症について検討できないかと考えている。

幼少期のペット飼育の影響については様々なメリットの存在が先行研究により示唆されているが、アレルギー発症については未だ議論の余地があり、幼少期のペット飼育がその後のアレルギー発症を低下させるという論文と、ペット飼育がアレルギー発症のリスクファクターであるという論文がそれぞれ発表されてきている。

本抄読会ではペットがアレルギーに与える影響について真逆の結果を示した2つの研究について紹介する。

参考文献

Zanobetti A, Wand MP, Schwartz J, Ryan LM. Generalized additive distributed lag models: quantifying mortality displacement. *Biostatistics*. 2000;**1(3)**:279-292.

人と動物の関係学研究チーム著 『ペットがもたらす健康効果』（社会保険出版社、2020年）

Hesselmar B, Hicke-Roberts A, Lundell AC, et al. Pet-keeping in early life reduces the risk of allergy in a dose-dependent fashion. *PLoS One*. 2018;**13(12)**:e0208472. Published 2018 Dec 19. doi:10.1371/journal.pone.0208472

Luo S, Sun Y, Hou J, et al. Pet keeping in childhood and asthma and allergy among children in Tianjin area, China. *PLoS One*. 2018;**13(5)**:e0197274. Published 2018 May 16. doi:10.1371/journal.pone.0197274